

芥川龍之介

続文芸的な、
余りに文芸的な



続文芸的な、余りに文芸的な

一 「死者生者」

「文章倶楽部」が大正時代の作品中、諸家の記憶に残ったものを尋ねた時、僕も返事をしようと思っっているうちに、ついその機会を失ってしまった。僕の記憶に残っているものはまず正宗白鳥氏の「死者生者」（ししゃせいしや）である。これは僕の「芋粥」と同じ月に発表された為、特に深い印象を残した。「芋粥」は「死者生者」ほど完成していない。唯幾分か新しかったただけである。が、「死者生者」は不

評判だった。「芋粥」は——「芋粥」の不評判だったのは吹聴ふいちようせずとも善い。「読后感とでも云うのかな。そう云うものの深い短篇だね。」——僕は当時久米正雄君の「死者生者」を読んだ後、こう言ったことを覚えている。が、「文章倶楽部」の問に応じた諸家は誰も「死者生者」を挙げていなかったらしい。しかも「芋粥」は幸か不幸か諸家の答えの中にはいつている。

この事実の証明する通り、世人は新らしいものに注目し易い。従って新らしいものに手をつけさえすれば、兎に角作家にはなれるのである。しかしそれは必ずしも一

爪痕そうこんを残すことではない、僕は未だに「死者生者」は「芋粥」などの比ではないと思っている、のみならず又正宗氏自身も短篇作家としては、「死者生者」を書いた前後に最も芸術的ではなかったかと思っている。が、当時の正宗氏は必ずしも人気はなかったらしい。

二 時代

僕は時々こう考えている。——僕の書いた文章はたとい僕が生まれなかつたにしても、誰かきつと書いたに違

いない。従つて僕自身の作品よりも寧ろ一時代の土の上に生はえた何本かの艸くさの一本である。すると僕自身の自慢にはならない。(現に彼等は彼等を待たなければ、書かれなかつた作品を書いている。勿論そこに一時代は影を落しているにしても。)僕はこう考える度に必ず妙にがっかりしてしまう。

三 日本の文芸の特色

日本の文芸の特色、——何よりも読者に親密 (intime)

であること。この特色の善悪は特に今は問題にしない。

四 アナトオル・フランス

Nicolas Ségur の「アナトオル・フランスとの対話」によれば、この微笑した懐疑主義者は実に徹底した厭世主義者である。こう云う一面は Paul Gsell の「アナトオル・フランスとの対話」(?)にも現われていない。彼は「あなたの作中人物は皆微笑しているではないか？」という問に対し、野蛮にもこう返事をしている。——「彼

等は憐憫れんびんの為に微笑している。それは文芸上の技巧に過ぎない。

このアナトオル・フランスの説によれば人生は唯意志する力と行為する力との上に安定している。しかし我々
は意志する為には一点に目を注がなければならぬ。それは何びとにも出来ることではない。殊ことに理智と感受性と
の呪のろいを受けた我々には。

「エピキュウルの園」の思想家、ドレフィイユ事件のチャンピオン、「ペングインの島」の作家だった彼もここでは面目を新たにしている。尤も唯物主義的に解釈すれ

ば、彼の頽齡たいれいや病なども或は彼の人生觀を暗いものにしていたかも知れない。しかしこれは彼の作品中、比較的等閑に附せられたものを、——或は事実上出来の悪いものを（たとえば「赤い卵」の如き）彼の一生の文芸的體系に結びつける綱を与えている。病的な「赤い卵」なども彼には必然な作品だったのであろう。僕はこの対話や書簡集から更に新らしい「アナトオル・フランス論」の書かれることを信じている。

このアナトオル・フランスは十字架を背負った牧羊神である。尤も新時代は彼の中に唯前世紀から今世紀に渡

る橋を見出すばかりかも知れない。が、世紀末に人となつた僕はやはりこう云う彼の中に有史以来の僕等を見出している。

五 自然主義

自然は僕等が一定の年齢に達した時、僕等に「春の目ざめ」を与えている。それから僕等が餓^うえた時、烈しい食欲を与えている。それから僕等が戦場に立った時、弾丸を避ける本能を与えている。それから何年か（或は何

箇月か）同棲生活の後、その女人と交まじわることに対する嫌悪の情を与えている。それから、……

しかし社会の命令は自然の命令と一致していない。のみならず、しばしば屡しばしば反対している。そればかりならば差支えない（？）。しかし僕等は僕等自身の中に自然の命令を否定する何か不思議なるものを持ち合せている。従ってあらゆる自然主義者は理論上最左翼に立たなければならぬ。或は最左翼の向うにある暗黒の中に立たなければならぬ。

「地球の外へ！」と云うボオドレエルの散文詩は決して

机の上の産物ではない。

六 ハムズン

性慾の中に詩のあることは前人もとうに発見していた。が、食慾の中にも詩のあることはハムズンを待たなければならなかつたのである。何と云う僕等の間抜けさ加減！

七 語彙

「夜明け」と云う意味の「平明」はいつか「手のこまな
い」と云う意味に変わり、「死んだ父」と云う意味の「先
人」はいつか「古人」と云う意味に変わっている。僕自身
も「姿」とか「形」とか云う意味に「ものごし」と云う
言葉を使い、すさ凄まじい火災の形容に「大紅蓮だいぐれん」と云う言
葉を使った。僕等の語彙はこの通り可か也なり混乱を生じてい
る。「随ずい一人いちにん」と云う言葉などは誰も「第一人」と云う
意味に使わないものはない。が、誰も皆間違っ
てしまえ

ば、勿論間違いは消滅するのである。従つてこの混乱を救う為には、——一人残らず間違つてしまえ。

八 コクトオの言葉

「芸術は科学の肉化したものである」と云うコクトオの言葉は中^{あた}っている。尤も僕の解釈によれば「科学の肉化したもの」と云う意味は「科学に肉をつけた」と云う意味ではない。科学に肉をつけることなどは職人でも容易に出来るであろう。芸術はおのずから血肉の中に科学を

具えている筈である。いろいろの科学者は芸術の中から彼等の科学を見つけるのに過ぎない。芸術の——或は直観の尊さはそこに存しているのである。

僕はこのコクトオの言葉の新時代の芸術家たちに方向を錯あやまらせることを惧おそれている。あらゆる芸術上の傑作は「二二が四」に終わっているかも知れない。しかし決して「二二が四」から始まっているとは限らないのである。僕は必ずしも科学的精神を抛ほうつてしまえと云うのではない。が、科学的精神は詩的精神を重んずる所に逆説的にも潜んでいると云う事実だけを指摘したのである。

九 「若し王者たりせば」

「我若^もし王者たりせば」と云う映画によれば、あらゆる犯罪に通じていた抒情詩人フランソア・ヴィヨンは立派な愛国者に変じている。それから又シャロット姫に対する純一無雑の恋人に変じている。最後に市民の人気を集めた所謂「民衆の味かた」になっている。が、若しチャプリンさえ非難してやまない今日のアメリカにヴィヨンを生じたとすれば、——そんなことは今更のようになら

ずとも善い。歴史上の人物はこの映画の中のヴィヨンのように何度も転身を重ねるのである。「我若し王者たりせば」は実にアメリカの生んだ映画だった。

僕はこの映画を見ながら、ヴィヨンの次第に大詩人になった三百年の星霜せいそうを数え、「蓋棺がいかんの後」などと云う言葉の怪しいことを考えずにはいられなかった。「蓋棺の後」に起るものは神化か獣化（？）かの外にある筈はない。しかし何世紀かの流れ去った後には、——その時にも香こうを焚かれるのは唯「幸福なる少数」だけである。のみならずヴィヨンなどは一面には愛国者兼「民衆の味か

た」兼模範的恋人として香を焚かれているではないか？
しかし僕の感情は僕のこう考えるうちにもやはりはつきりと口を利いている。——「ヴィヨンは兎に角大詩人だった。」

十 二人の紅毛画家

ピカソはいつも城を攻めている。ジアン・ダアクでなければ破れない城を。彼は或はこの城の破れないことを知っているかも知れない。が、ひとり石火矢いしびやの下に剛情

にもひとり城を攻めている。こう云うピカソを去ってマ
テイスを見る時、何か気易さを感じるのは必しも僕一人
ではあるまい。マテイスは海にヨットを走らせている。
武器の音や煙硝えんしょうの匂はそこからは少しも起って来ない。
唯桃色の白の縞しまのある三角の帆だけ風を孕はらんである。僕
は偶然この二人の画を見、ピカソに同情を感じると同時
にマテイスには親しみや羨ましさを感じた。マテイスは
僕等素人しろうとの目にもリアリズムに叩きこんだ腕を持ってい
る。その又リアリズムに叩きこんだ腕はマテイスの画に
精彩を与えているものの、時々画面の装飾的効果に多少

の破綻を生じているかも知れない。若しどちらをとるか
と言え、僕のとりたいのはピカソである。兜かぶとの毛は
炎に焼け、槍の柄は折れたピカソである。……

(昭和二年五月六日)

日本文学電子図書館

続文芸的な、余りに文芸的な

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館